



2014年の秋、澤木鶴匠の手のうえで羽を広げる「うみうのウッティー」。
2015年春には鶴飼デビューを果たした



ペンライトで卵を透かした写真。
卵のなかは透けている



卵内部に血管のようなものが見える

日本・京都府宇治市



ウミウの卵を校卵してみました

今後の繁殖計画について話し合いをしているわたし(左)と松坂鶴匠(中央)、澤木鶴匠(右)。宇治川鶴飼の事務所にて

〇〇してみました世界のフィールド

「うみうのウッティー」 が教えてくれたこと

うだ しゅうへい 卯田 宗平 民博 先端人類科学研究部

ある調査地で身につけた知識や技術が、別の場所で必要とされることもある。それは、それぞれの場所が「地続き」であることのおかげでもあるだろう。

ペンライトを握りしめ

これは、ある研究者のちょっとした技術が、フィールド先で思いがけず役に立った話である。

今から二年ほど前の二〇一四年六月二九日、宇治川鶴飼においてウミウのヒナが誕生した。のちに「うみうのウッティー」と名付けられ、鶴飼デビューを果たすこのヒナは、卵のなかで嘴打ちを繰り返して、およそ二日をかけて卵から出てきた。千年以上の歴史をもつ日本の鶴飼において、ウミウが人間に見守られながら誕生したという記録はない。翌日の新聞各社やネット上のニュースには「日本初、鶴飼のウミウ誕生」の文字が躍った。

「ウミウ誕生」の騒ぎから二日前の六月七日、わたしはペンライトを握りしめ宇治川鶴飼の事務所に向かっていた。その年に産まれた三つの卵を検卵するためである。日本の鶴飼では茨城県日立市十王町で捕獲された野生のウミウが利用されており、ウミウを人工の管理下で繁殖させた経験がない。そのため、鶴飼の現場では卵が有精卵かどうかを判断する技術がなかった。検卵で有精卵とわかれば育雛器や給餌道具などを準備する必要があった。検卵作業は次のステップを考えるうえで重要なのである。

じつは、中国で鶴飼の調査をしていたわたしは、江蘇省の漁師たちから検卵技術を教わっていた。自宅で鶴飼用のカワウを繁殖させる漁師たちは、産まれてきた卵を次々と検卵する。わたしはそんな漁師たちから伝授された技術をもって宇治市に向かったのである。

宇治川鶴飼の事務所に着いたわたしは、鶴匠たちから産卵の状況を聞いたあと、さっそく検卵作業を始めた。そして、孵卵器のなかにある三つの卵のなかのひとつをおもむろに指さし、「有精卵の可能性が高い」といった。それが、今



2014年に産み落とされた3つの卵

の「うみうのウッティー」である。

ここで「伝授された技術」と大げさなことをいったが、検卵の技術はシンプルである。それは、卵を暗いところに持っていき、ペンライトで透かし、卵黄や血管のようなものが確認できれば「有精卵」と判断するだけである。その日わたしは、事務所の裏にある倉庫に入り、ドアを閉め、真っ暗にしたうえで検卵をした。そして、ひとつの卵を有精卵と確認し、興奮しながら倉庫から出てきた。

再び、ペンライトを握りしめ

今から二年ほど前の二〇一五年四月二八日、わたしはペンライトを握りしめ再び宇治川鶴飼の事務所に向かっていた。その時点で産まれていた十一個の卵を検卵するためである。宇治川に着いたわたしは、昨年と同じ場所と同じように検卵をした。そして、「有精卵の可能性が高い」と判断した卵が後日、孵化した。ただ、この年は「無精卵」と判断したものが結果的には中止卵(胚の分裂が途中で止まった卵)であったり、産卵日から日数が経っていたためペンライトの光を透さない卵があったりした。また、鶴匠に同行して宇治市の動物病院に行き、そこで超音波を使った検卵(エコー検卵)も試みた。しかし、卵のなかのようすは不明瞭であった。検卵二年目は検卵の難しさを経験した。

中国で検卵技術を教わっていたとき、まさかこの技術が日本の鶴飼で利用できるとは思ってもしなかった。一般に、フィールド調査では世間であまり知られていないことを調べる。その過程で得る知識は、多くの人たちが経験したことのないものである。今回の場合は、そうした希少な知識が偶然、国境を越えて(少しだけ)役に立ったのである。フィールドでは予見なく何でも経験しておくことが重要である。そんなことを、「うみうのウッティー」は教えてくれる。